オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂装飾の制作をめぐる一考察
―ピントゥリッキオ工房のグロテスク装飾との関連から―

九州大学大学院　森　結

本発表はルネサンス期の画家ルカ・シニョレッリに名声を与えた、オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂装飾事業について取り扱う。この装飾事業は 15 世紀末に着手され、先行研究では世紀末という時代状況とアンチ・キリストを描いた壁画の主題が関心を呼び、ルネッタの分析を中心に研究が行われてきた。これに対し本発表は、従来先行研究において扱われることの少なかった腰壁装飾の様式分析をその主眼とする。

本礼拝堂の腰壁装飾には、付け柱などで構成された建築的枠組みが描かれており、またその区画の中には古代の詩人の肖像と、彼らの著作の場面が描かれ、その周縁はグロテスク装飾で充填されている。それではなぜ礼拝堂という聖なる場において、このように異教的な要素が、大きな割合を占めることができたのだろうか。これを手堅く説明する先行研究はそう多くはない。わずかに新礼拝堂における古代性を、当時の大聖堂の助祭であったアントニオ・デリ・アルベリなど、教皇庁とのパイプを有していたオルヴィエートの人文主義者の要請であっただろうと、人的関係から推測するばかりであり、作品分析からの視点は欠けていたように思われる。そこで本発表は新礼拝堂の腰壁装飾が、まさにピントゥリッキオ工房による教皇庁及びローマでの装飾事業の図案を導入していることを指摘し、上記の説明を裏付けることをその旨とする。

まず腰壁装飾の形式と細かなグロテスク装飾に関して、ピントゥリッキオ工房のローマのペニテンツィエーリ宮殿の腰壁装飾の形式および天井装飾のモチーフ、そして教皇庁の「ボルジアの間」の装飾モチーフとの類似を指摘したい。前者はデッラ・ローヴェレ家の私邸であったことから、シニョレッリがこれを直に取材したというよりは、本装飾事業に、ピントゥリッキオ工房が関与していた可能性が高いといえる。シニョレッリ自身のグロテスク装飾の語彙の変遷を確認すると、本装飾事業において突如としてその語彙が豊かになることが裏付けられ、この点からもピントゥリッキオ工房の装飾事業の下絵が提供されたと見なされるだろう。ピントゥリッキオは当時オルヴィエートと同様のウンブリアの都市を拠点として活動していたのであり、シニョレッリは雇用主側の要請に呼応する形で、彼と結びつくことは可能であったのである。

本発表による腰壁装飾の様式分析と、先行研究でのアルベリの新礼拝堂装飾事業における助言者としての可能性を考慮するならば、新礼拝堂の壁画装飾は教皇庁の要人をその理想の鑑賞者として設けていたと考えられる。これは、オスマン帝国によりキリスト教世界が脅威に晒された当時の教皇庁の危機が、本礼拝堂の装飾と同期させられているという、近年のアンチ・キリストのルネッタの解釈とも符合する。これを勘案するに、新礼拝堂の装飾は、教皇領の一都市であり、ローマ教会にとって聖体の秘跡を証明する重要な聖遺物を保持する、教皇庁の忠実な僕としてのオルヴィエートの自負を発しているといえよう。シニョレッリが本礼拝堂の腰壁装飾の雛型として選んだのが、ピントゥリッキオ工房がローマで手がけた、教皇庁と結びついた一族の邸館や居室の装飾であったという本発表の指摘は、その確かな証左といえるのである。